京都大学文学研究科　グローバル COE　「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

（ふりがな） 氏　　名	（なりた　けんたろう） 成田　健太郎	所属・職名 文学研究科中国語学中国文学専修・博士後期課程
e-maill		
発 表 題 名 （中国語）	書体を詠う韻文ジャンル「勢」とその周辺 （詠讃書體的韻文體領域“勢”及其周邊）	
著　者　名	成田健太郎	
会　議　名 （中国語）	「中国言語文学と社会文化」大学院生国際学術学会 （“中國語言文學與社會文化”研究生國際學術研討會）	
開催地（国、市）	中国、南京	
参 加 期 間	２００９年　７月　５日　　～　　７月　９日	

当該学会は、中国大陸、香港、台湾、韓国、日本、シンガポール、英国等の国と地域の３３の大学から、中国に関係する文学、言語学、社会学、歴史学、文化学等を専攻する１３６名の大学院生が集まり、各自の研究成果を発表し、同時に大学院生がコメンテーターを分担し、また自由討論に参加するという、大規模でしかも特色のある学会です。会の進行に当たってはすべて中国語（普通話）が用いられます。

研究発表は６つの会場に分けられ、それぞれの会場に属する大学院生が、予め決められた他の参加者の発表のコメンテーターを務め、また自由討論に参加します。発表時間はごく限られていますが、初日に論文集が配布され、自身がコメンテーターを務める発表はもちろんのこと、自由討論に参加するためにも、かなりの量のある論文を予め熟読しておくことが必須となります。このような準備作業を会場到着後のわずか１泊の時間内に行うことは、中国語母語話者でない私たちにとってはもちろん、中国語母語話者である参加者にとっても決して楽な課題ではなかったはずです。しかしながら、どの会場においても参加者の積極的な発言が相次ぎ、有意義な討論が交わされました。

私自身は、書という中国独特の藝術の美を語るために古代の中国人が創り出した独特の文体について研究成果を発表しました。私の考察の主眼はその文体の成立過程にありましたが、コメンテーターの発言をきっかけに、このような文学がはたして書の美を表現しうるかという重要な問題を提起され、以後の研究に向け新たな着眼点を得ることができました。また、コメンテーターを務める機会もあり、拙劣な中国語ながら自分なりの問題点を提起し、発表者の丁寧な回答を得、討論において一定の役割を果たしました。

会期中には、研究発表・討論の場に加え、基調講演、昆劇鑑賞、揚州文化視察等の催しも組まれ、同世代の研究者との交流の場とすることが出来ました。

異なる国･地域から集まった大学院生の間で活発な討論が可能となるのも、東アジアには相互理解のための共通の土台が伝統として備わっていることによるのだと切に感じました。また、これからの東アジアにおける親密圏と公共圏の再編成を担う次世代の研究者が一堂に会し交流を深める機会を与えられたことに感謝しています。